

旭晨、竹本旭将、絃旭盛 あつもり宮垣旭
 湖、湖水渡、木庭旭山、姫百合の塔、西川旭
 操、絃旭岡、旭璋、未練西行(録音)、一故中
 沢旭洋、秋風故郷山、栴本旭風、絃旭岡、旭
 暢、旭操、旭楓、安宅の関、橋本旭司、伽羅
 の兜、伊藤旭暢、皇女和の宮、原島旭粧、大
 物の浦、神戶田中旭昇、堅田落、同松岡旭文
 菅公、大阪喜多旭修、小松原、神港紫田旭堂
 原松右エ門、松岡旭岡

錦心祭全国大会 十一月十四日(火)午前九
 時半東京銀座ガストホール、
 主催一水会都内七支部 月下の陣、杉山旗水、
 絃鈴木琢水、常陸丸、仙台佐藤礎水、本能寺、
 平塚吉村仙水、俊寛、富山細田辰水、蓮生坊、
 武蔵野小川眺水、恩替の彼方、秩父原田刀水
 相模湖、弘前中村光水、西郷隆盛、多摩石井
 效水、清水袋水、加藤喜水、中島澤水、中村
 修水、伊藤磐水、小栗栖、藤沢榎本山水、井
 伊大老、高崎反町昇水、屋島の誉、金沢村田
 知水、飯盛山懐古、足利吉田竜水、太田道彦、
 甲府山口碇水、吹雪の敵、小田原鈴木謙水
 川中島、札幌松永育水、城山、埼玉花俣圭水
 静、道東黒木照水、吉野落、酒田佐藤烈水、
 桜狩、城西斎藤昭水、直井洋水、秋山深水、
 寺山注水、佐藤源水、扇の的、中央古宮蘭水、
 絃園枝暎水、湖水乗切、江北田中光水、木村
 重成、名古屋阿部勝水、桶狭間、川崎水主粉
 水、高橋忠水、中村開水、池上福水、青木灯
 水、絃成田双水、白虎隊、横須賀瀬谷香水

○：京都琵琶協会十二月定例茶話会 十二月
 十一日(月)午後三時、忘年会を兼ね錦高
 倉西入料亭富太楼に於て開催
 ○：日本琵琶振興会忘年会 十二月十日(日)
 箱根町湯元茶屋青風荘一泊(小田急箱根湯
 元駅から徒歩七七八分)

一(訂正)一
 ○：京絃十月号第一頁「上皇と麻鳥」二行目
 旅の歌は歌の旅、十一行目後坊(こりほり)
 は(こぼり)の誤植
 同十一月号「新曲建礼門院右京大夫」第四
 頁中段七行目瀬戸の里は瀬戸の海、止めの
 急ぎけりは急ぎけるの誤植

あ 光陰矢の如し。古い言葉を持ち出
 して些か面はゆい。今年には本当に早
 く暮れた一年であった。齢をとるほ
 ど月日のたつのが早いという気が持
 たい。若くも若くも若くも若くも若くも
 若くも老境に入ったのかと昨今つくづく考えさ
 せられる。徒らに馬蹄を重ねるばかりで琵琶
 の方は一向に上達せず誠に恥かしい次第。あ
 と一ヶ月で新しい年を迎える。どうぞ来年
 が良い年でありますように。京絃正月号は豊
 かな内容の記事を満載して読者各位の御期待
 に背かないよう今から大いに張切って想をね
 っている。同時に新年号は例年通り名刺交換
 号として貴名を掲載し絃友相互間の旧友を温
 ため且新しい年の発展を契い合いたい。平常
 気にかかっているも葉書一枚書くことが何で
 もない事とわかっていながら、ついつい御無
 沙汰勝ちになっている。お互いの健在を祝し
 合うためにも有意義。どうか奮って御協賛下
 さって錦上花を添えて頂きたい。では良いお
 年をお迎え下さい。

昭和四十七年十二月一日発行(非売品)
 編集者 植村 寛 水
 発行所 京 絃 社
 〒569 高槻市津之江北町一の一三
 電話 〇七五 六〇五一番

琵琶 機関紙

京

絃

第二二二号 京 絃 社

可愛がられる琵琶の曲目

編集部

琵琶人はどのような曲目がお好きか? 昨
 年九月から今年八月までの一年間に、全国各
 地から京絃社に寄せられた随筆各流派の演
 奏会約七十回のプログラムから、演奏された
 曲目を拾ってみたら次のような数字が出た。
 即ち、一番多く演奏されたのが「白虎隊」、
 次ぎが「本能寺」で、これは去る三十九年と
 四十三年の同じ一年間を調べたときも一位白
 虎隊、二位本能寺、続いて城山、竜の口等の
 順であったが、これらの曲目が如何に琵琶人
 に可愛がられているかがわかる。

今回の調査第三位の「城山」は、前回は「
 竜の口」が第三位を占め、四位の「扇の的」
 に対し今回は「西郷隆盛」で、兎に角琵琶人
 の好む曲目は大同小異であり、特殊の場合を
 除き大体の趨勢を知ることが出来る。

以下演奏回数が多かったものから順次掲載
 して参考に供したいと思ふ。たゞ例外として
 前回「新撰組」は二十七回、「茨木」三十三
 回、「木村重成」十五回、「俊寛」十四回、

- 「桶狭間」九回、「富樫の涙」「恩替の彼方
 へ」各七回など今回の調査よりも格段に多か
 ったもの、又反対に「衣川」の四回、「秋風
 故郷山」の五回など少なかつたものもあって、
 興味のある現象を示している。
- (三十九回) 白虎隊(花の白虎隊、会津白
 虎隊等の小曲を含む)
 - (三十四回) 本能寺
 - (三十一回) 城山
 - (三十回) 扇の的(屋島の誉れ、那須与市等
 を含む)
 - (二十九回) 川中島(河中島及び霧の川中島
 等の小曲を含む)
 - (二十四回) 菅公
 - (二十三回) 西郷隆盛、湖水渡り(湖水乗切
 を含む)、敦盛(若き敦盛、小敦盛
 等を含む)
 - (二十二回) 竜の口、石童丸(小曲石童丸を
 含む)
 - (十八回) 別れの盃、月下の陣、舟弁慶(大

物の浦を含む)

- (十六回) 羅生門、井伊大老、小栗栖
- (十五回) 彰義隊
- (十四回) 大楠公(補正成を含む)
- (十三回) 衣川、山科の別れ
- (十二回) 吉野山懐古、坂崎出羽守、新撰組、
 静、安宅(勸進帳を含む)、茨木(網
 鎖を含む)
- (十一回) 秋風故郷山、桜狩、羽衣、鉢の木、
 松の廊下(松の間を含む)、橋弁慶
 (五条橋を含む)
- (十回) 堅田落、菊水の旗、関ヶ原、常盤御
 前(母常盤を含む)
- (九回) 常陸丸、薄陽江
- (八回) 雪晴れ(義士討入を含む)、荒城の
 月(荒城月夜の曲を含む)
- (七回) 曲垣平九郎、棄児、加藤清正(地震
 加藤を含む)
- (六回) 忠度、俊寛、広瀬中佐、七城落、青
 葉の笛、小督、伊豆の御難、栗津の

京絃社移転

このほど左記に社屋が落成しましたの
 で十月二十九日移転致しました。従って
 電話番号も変わりましたので併せて御了承
 下さい。

高槻市津之江北町一の一三
 (国鉄高槻駅西口下車徒歩十五分)
 電話 〇七五 八五一六〇五一番

(五回) 重衛、伽羅の兜、嵯流島、紅葉狩、旅順開城、姫ゆりの塔、元寇、北の庄、夢

(四回) 小松の操、春の調べ、隅田川、村上喜剣、金剛石、嵯峨の秋、河内の宿、桜井の歌、小袖曾我、木村重成、弁内侍、蓬菜山

(三回) 桶狭間、隅田川、君ヶ代、武蔵野、未練西行、田村邸、大石主税、父乃木將軍、花紅葉、屋島回顧、売花翁、さくら、禪師と正宗、薩摩の乙女、黒田武士(名鎗日本号を含む)、芭蕉、桐一葉、送別、戦艦大和、柳の精、玉藻の前、耳なし芳一、巡礼お鶴、台湾入、壇の浦、宮本武蔵(一乗寺決闘を含む)

(二回) 吹雪の敵、門出、橋大隊長、滝善三郎正信、藤の梅、春日野、那智の荒行、富樫の涙、誉れの水馬、坂本竜馬、森蘭丸、時雨曾我、兎と亀、月に偲ぶ、秋海棠、楊貴妃、菅原の月、千手舞姫、伏見の吹雪、大高源吾、天目山、日本海々戦、娘みゆき、異国の丘、乃木大將、奇縁、勿来の関、みどり、安達ヶ原、太田道灌、間十次郎の妻、花の若武者、大徳寺、恩讐の彼方へ、古城懐古、横笛、迷語もどき、山内一豊の妻、形見の桜、由比ヶ浜、熊野、平野国臣、湊川、九段の桜、景清

(一回) 春霞、木曾最後の一節、大和懐古、

四条藤、裾野の暗、七福人、石の枕、良寛、関白秀次、文福茶釜、経正、悪源太、錦の御旗、風雲児、松岡幸造、壺坂寺、長柄の秋風、お蝶夫人、石田三成、豊川女子挺身隊、義朝の最期、浮田秀家、小松原法難、將軍悲歌、土くも、高松城、上皇と麻鳥、桂、建礼門院右京大夫、政綱、片割月、知己、乱水菊、清水清玄、紅葉時雨、光秀の最期、粟津の巴、じが、木崎原、薩摩義士、三島由紀夫の死、加茂の宵月、あけぼの、お市の方、勝頼と友信、時頼通歴、乾坤、月照、十三夜、老の坂、高田屋嘉平、袈裟と盛遠、田原坂、若き日の謙信、澁廻り、梅ヶ枝、嶽島の戦、道成寺、綾の鼓、赤沢山の夕嵐、墨絵、児玉南翁、王昭君、一万箱王、御夢の跡、浜松城、弁慶、花吹雪、仏御前、大原御幸、滝口入道、平手造酒、佐渡の日蓮、一休禪師、紀之國屋文左衛門、奉書仕合、虞美人草、泊り舟、宗良親王、高野の落花、市九郎発心、修善寺物語、名月逢坂山、九段の桜、茶臼山、九連城、淀君、野田の笛、富士山、二〇三高地、北条時宗、阿新丸、橘の香、鶴ヶ岡、松浦の太鼓、伊吹嵐、二葉の浦、戻り橋、噫八月十五日、噫、尼港、凱旋乃木、後鳥羽院、頂雨、中村大尉、鶴の舞、月華、佐久間長兵衛、風流將軍、北海の姫小松、戦友、豊太

閣、茶絃録、鴨川の露、旅、相模湖、枚方堤、鷹料理、楠塚、武士の意地、清水一角、辻説法、うつほ猿、噫全日空機、養老、水天門、弁財天、桂小五郎、山吹の夢、玉黄金、千之利休、湖底の月、宮比の舞、おぼろ月夜、高田の馬場、藪の中、恩讐追分節、裾野の雨、乃木將軍鹿島詣

重ねて申上げるが、これは過去一年間に京絃社に各地から寄せられた演奏会のプログラムから拾った数字のみであって、大体の状況はわかるにしても、これを決定的と断定するのは危険である。また演奏者の流派により、男女別により、年令別により、或は演奏会開催の時の関係等によっても、結果は色々変わって来るだろう。だから白虎隊、本能寺などを優位と決定づけるのは乱暴とも云える。従って本統計の数字は飽くまでも参考資料と解釈して欲しい。

十二月十二日(火)午後二時
NHKラヂオ第一

村木桜柳女史放送
錦びわ
「須磨の敦盛」
(十三分)

狂醉亭漫録(第八十五)

討入義士の款待(一)

古谷 寛 水

討入義士十名を御預けの沙汰を被った久松隠岐守家では、愛宕下なる上邸の長屋十戸を空けて一党の居間に充て、隔離して分置する事とし、馬廻乃至大小姓格の上士四人、持筒二人、足軽四人、中問二人、都合十二人を両組に分け、之を接待役として六人宛隔日に交代し、伺候させる事とした。十二月十五日夜半受取勢二百余人は十挺の駕籠を護衛して本邸に帰った。時に太守隠岐守定直は病中乍ら玄關まで出迎え、直ちに家老遠山三郎右衛門、服部源左衛門に接待の役を申付けた。

即刻風呂を賜り衣服を取更えられ、此処でも二汁五菜の献立が出る。又各人への支給物は小袖三枚、上帯一筋、下帯一筋、夜着一枚、蒲団二枚、被褥枕一個、胴衣二枚、風呂敷一枚、手拭二筋であった。薄茶煎茶菓子も出た。接待上の細目をも老中まで伺い出た。

浅野内匠頭家来御預に付相伺候覚
一御預者共十人今夜は私居屋敷内長屋間に一人宛差遣申候。尤番人夫々付置申候。明日は三田屋敷へ差遣可申候。
一若氣分悪敷節は輕體に候はゞ、手医者之業可用可申哉之事。

一上帝下常之通為仕可申哉之事。
一櫛道具毛ぬきはさみ扇子望候はゞ如何可仕哉之事。
一楊枝望候はゞ相渡可申哉、並著は短く仕、食事之節用可申哉之事。
一硯紙等望候はゞ如何可仕哉之事。
一行水盥候はゞ如何可仕哉之事。
一自然火事等之節は下屋敷へ遣可申哉之事。

老中は之を披見し、用人を呼出し口上にて「内匠頭家来の者共、永く御預になる訳でもなく、其上彼等は公義に對し奉り悪事を働いたというでも無いから、心付次第好く取扱はれるように」と申し渡し伺書は差戻された。久松家では上邸の火災等の不用心を慮れ、翌十六日三田の中邸に一同を移させた。家士波賀清太夫(此人の事は去る一月号にて紹介した)は足軽廿二人に中邸を固めさせ、次に士分二十人前衛、駕籠一挺毎に騎馬二人歩行二人足軽十人之を護衛し、最後に家老遠山三郎右衛門一隊を率い、中邸長屋十戸に別々に収容したが、此事幕廷に聞え、「一党を二組に分ち、各五人宛を二間に同居させよ」との訓令あり、同月廿五日実行した。即ち

一番の長屋には
大石主税 堀部安兵衛 中村勘助
具賀弥左衛門 不破教右衛門
二番の長屋には
岡野金右衛門 大高源吾 菅谷半之丞
千馬三郎兵衛 木村岡右衛門

を收容し、上士二十四人を接待係之に持筒二十四人先筒三十人中問十二人都合九十人を二組に分け警固を任じ交代に詰めさせた。更に番頭奥平平次郎左衛門、佃九兵衛を始め物頭目付徒歩目付等に昼夜厳重に警戒させた。

隠岐守は正月に至り病氣全快届を幕府に提出の上、五日中午に起き義士達を引見した。「此度の一挙本望を達し満足ならん。心事の程感じ入る。自分も病中の為今日まで延引したが、公儀に對し憚る所もあり馳走の儀も心に委せぬ。併し不自由なき様申付たれば所望あらば申出でられよ」と挨拶した。又今後を慮り衣服の新調、金子まで用意させた。

大石主税は人間的で、到着時付人達は競ってその足を洗ったとある。隠岐守は一回引見の後特に主税に對し、母の動静や兄弟の事を懇切に尋ねたので、主税も「昨年京都を發足し御当地に罷越しました以来一函に復讐のみを存じ詰め、母の事は存じ出す暇も無くて居りましたが、唯今御懇切の御下問を蒙り按じ出だしますれば何とやら懐かしい氣も致しまする。」と言葉も曇って打湿める。満座の人々暗涙を催したとある。

其後主税が強い寒胃で高熱を發したので、侍医に充分の手当をさせ全快したが、此事が細川家の堀内に伝わり、内蔵助の耳に入れたので内蔵助は言葉少なに「毎度御氣付忝り存じます」と答えたが、関係者一同の配慮に感じ、満面に喜色を浮べたとある。
毛利甲斐守家も十人を預り麻布日ヶ窪の上

邸に収容したが、此藩は俗物の集団で義士達を囚人扱いし護送の途中も駕籠の戸に錠を鎖し其上から青綱まで掛けたと云う。収容した長屋の窓は板を打付け、短気かの武林唯七等は大いに憤慨した。然るに細川家等の待遇状態を聞き大あわてで俄に態度一変し、二汁五菜は出る、衣服其他の必需品も支給される、接伴態度も改まり、毛利甲斐守自身も一同を引見するという始末であった。収容者は

- 岡島八十右衛門 吉田沢右衛門 武林唯七
- 倉橋伝介 村松喜兵衛 杉野十平次
- 勝田新左衛門 前原伊助 間新六
- 小野寺幸右衛門

水野監物家は金地院前中邸の長屋に九人を収容した。同家は小藩乍ら日頃から武備を以て開えた家柄であり、お預けの沙汰に接するや他の三家に先立ち泉岳寺へ人数を繰出す等の手際であったが、治に乱を知らぬ偏屈者多く、護送の途中駕籠の戸を鎖し、邸内の警固も戦時同様に一同小具足に身を固める等世上の物議を惹いた。併し君侯監物は十二月二十一日間十次郎以下九人を召し出し鄭重に慰藉を加えたので、神崎与五郎の如きは之を徳とし「尊顔を拝し奉れば御感を蒙り、暫く微衷を慰む。」と称し一詩を賦したとあるが、残念乍ら此詩は判明しない。兎に角当家の待遇も疎かでは無かった。同家の収容者は

- 間十次郎 奥田貞右衛門 矢頭右衛門七
- 村松三太夫 間瀬孫九郎 神崎与五郎
- 茅野和助 横川勘平 三村次郎左衛門

之で大体義士四家お預けの模様を記した愈々切腹の話に移るが、未春筆硯を新たに引き続き執筆致します。読者諸賢のご機嫌美しく越年されん事を祈ります。

新年特別号発行について
遠隔地同好者間の旧交を温め、且つは京絃援助の思召しをも含めて多数御協賛下さるべく、別紙申込用紙に料金を添え十二月十日迄に御申込み願ひ上げます。

琵琶の音にのせて

平家没落の哀史を語る

辻 旭城

京都洛北大原の里を歩く時「平家物語」を忘れては、平凡な山里の風景としか感じられない。京都では目に触れるもの、総てに、古典や歴史がまつわりついている。風景に歴史の重み加わって、深みを増しているのだ。好むと好まざるとに拘らず、過去を離れられないのが古都なのである。寂光院のある草生の里は、大原盆地の西北

隅にある。三千院から律川沿いの道を下っても、呂川沿いの道を下ってもよい。共にバス道に出る。寂光院への道は幾つかあるが、何れも道標がある。自動車なら、大原小学校の北から山沿いに入ればよい。

寂光院の東に建礼門院の御陵がある。勝林院と三千院との間の後鳥羽、順徳天皇陵に対して、大原西陵と呼ばれる小さな五輪石塔の墓標は、薄幸な皇后の生涯を物語っている。寂光院の前を少し奥へ入ると、右手石段の上で建礼門院に最後まで仕えた阿波内侍と、大納言佐局の墓が杉の大木の下にあった。文治二年(一一八六)四月、後白河法皇は洛北鞍馬寺への参詣を兼ね觀極をされる触れ込みで、そっと御所を出られた。しかしそれは表向きで、実は大原の建礼門院に逢うためであった。琵琶に歌われる「大原御幸」である。

「……静原から江文時を越えて大原の里に出ると、西の山の麓に一字の御堂あり、即ち寂光院これなり。ふるう作りなせる前水木立よしある所のさまなり。いらか破れては霧不斷の香をたき、とほそおちては月常任の灯をかかぐ。」(平家物語の一節)

建礼門院が涙ながらに後白河法皇に述べた言葉の中に「私はみ仏の説き給うた六道とやらを、生きながらにして総てを体験しました。清盛の娘として生をうけ、安徳天皇の生母となり、その頃一天四海は何事も思ひのまゝでありました。明けても暮れても楽しみ栄えた

頃は「天上」界もこれほどではあるまいと思われました。ところが「人間」は愛する者に別れ、憎しみ合う者が会わねばならぬとか、それも残る所なく体験させられました。源氏に追われ、西海の船上では食べ物不自由し、たまたま食べるものはあつても水が無くて食べられない、大海の上にながら呑めない苦しきは「餓鬼」道そのまゝでした。

しかも絶え間ない戦いの声、太刀の音、弓矢の響、それは「阿修羅の世界」だった。戦に破れて無惨にも親は子に、夫は妻に、別れるのは戦のならわし。南無妙法蓮華經と小さい手を合わせて念仏しつゝ、二位の尼に抱かれて西海に沈んで行った我が子安徳帝の姿は、今もなお忘れられない。人々の泣き叫ぶ声、それは「地獄」の凄まじさであった。しかも死に切れずに波に漂っている私は、源氏の荒武者達に不本意にも捕えられてしまった。それからの毎日は「畜生の生活」としか云いようがない。六道とは、この世界を十に分けたとき、声聞、縁覚、菩薩、仏、の四つの悟りの世界に対して、迷いの世界を意味する生きながらにして六道をかけたつた建礼門院は、誠に教奇な運命にもあそばされた女性であったと云えよう。

しかしこの大原でやっと安住の地を見いだし、ひたすら我が子安徳天皇の菩提を吊りたい、仏の救いを念じ続けた女院は、建久二年(一一九一)二月中旬、西の空に紫雲棚引き、異香室に満ち、音楽空に聞こえる中で、阿弥陀

如来の迎えを受けてこの世を去り、永遠の安らぎの世界に往生した。

源平両軍の争いについて世の無常を感じたのは、勝者の源氏方にとっても同様であった。一の谷の戦いに我が子と同じ年頃の敵将、若平致盛を心ならずも討ちとつた豪将熊谷次郎直実は、いたく無常を感じ致盛の菩提を吊らうために出家して、法然上人の弟子となった。当時上人の説く浄土念仏の教えに、不信を抱いた旧仏教の学僧達が高僧に討論を申し入れる。世に有名な「大原問答」である。この討論会は、文治二年(一一八六)大原の勝林院で、命をかけての問答が開始されたのであるが、このとき熊谷蓮生坊(直実)は上人に付添いの僧として同行したが、お師匠さんに万一の事があつては、と法衣の袖になたを隠して随行した。上人は早くもこのことを知り、関東武者の心を捨て切れぬ蓮生坊に、その非を悟してなたを捨てさせた。今も尚勝林院の前には「なを捨ての鼓」が残っている。

全国の筑前琵琶

演奏者各位え

企画者”が頒布する

カセットテープについて

江口 信 順

私は今まで主として筑前琵琶の宗教曲を中心に、特定の演奏者に録音させたテープを全国の寺院住職に頒布してまいりました。それは筑前琵琶を宗教家に理解させる意図から発足したもので、私が三世宗家旭翁師公認の宗教曲普及会の代表者だったからです。

ところで旭翁宗家のいわゆる新曲の中で、私が関係した(企画者として)異色三曲のうち「華道・華の恵み」は、今でも全国大会などに登場して異彩を放ち、私としても感慨なきを得ません。この歌詞の作詞者は小椋文子という婦人の名前ですが、実は例の吉賀敬吾氏がご自分の娘さんの名を使つた空前絶後の措置でした。

この歌詞の企画は実は私で、当時作詞料と作曲料を僅かでしたが吉賀氏と旭翁宗家に支払っています。たゞ華道家元・池坊当局のお家の事情で、発表を保留していたものが変形して、あのような形で発表されたものです。

また、歌人・柳原白蓮女史作詞の異色、反戦琵琶歌「悲母の願い」も旭翁宗家の作曲ですが、企画者は私で、私が白蓮さんに作詞させたものです。

言

山崎街道の墓は信をおきかねるが京都今出川千本の上善寺には墓とともに過去帳が残っている。但し本名は「おかし」で上京区一番町で本の刻板を業とし後年寺町二条に本屋を営んだ二文字屋の娘で十八才頃大石良雄の小間使となった。

次に同様の「佐渡の義人・意盛法印(けんせいほういん)の物語」の曲もあります。この作詞は吉賀敬吾さんですが、私が吉賀さんに文獻を提供して作詞させたもので、この「悲母の願ひ」は現在在原島旭好さんが現役の演奏者といえるでしょう。

「佐渡の義人」のほうは、最初は太田旭好さんでしたが、現在はこれも原島さんが演奏しています。

そんなわけで「華道・華の恵み」は、宗家直接録音のテープと、後者の二曲は原島さん録音の都合三曲のカセットテープを、企画者の私から全国の演奏者各位に購入していただきたく、これらの作曲秘話並びに旭翁宗家、白蓮女史などの信書の写しや歌詞をつけて頒布することにしました。筑前琵琶のフアンの立場で東京で二十年、苦闘いたしました私の録音テープ「声の琵琶新聞」をどうぞご購入下さい。

お問合せは東京都中野区上高田一丁目三六一六、東京筑前琵琶振興会、江口信順宛に。

右江口信順氏の依頼により原文のまま掲載しました。(一係)



武絃会 第九十一回 合同研修会 十月八日(日)午後一時〜七時小金井市福祉会館。舟舟慶一、奥野静軒、紅葉狩一、渡部喜山、常陸丸一、藤原優水、千曲川旅情一、石井敦水、本能寺一、伊藤馨水、伊豆の御難一、中村修水、坂崎出羽守一、押谷君水、月下の陣一、工藤愛秀、竜の口一、橋本草水、静一、加藤喜水、城山一、佐藤皓水、村上喜剣一、菊地甘水、川中島一、松田殊水、屋島の誓一、清水塚水、宮本武蔵一、杉山旗水、勳進帳一、坂本錦道。

第十三回中部琵琶連盟 十月二十二日(日) 秋の演奏会 午後一時名古屋市中

中小企業福祉会館六階ホール。合奏奏猿一、杉野旭房、久世旭扇、川中島一、丹野誠水、加藤清正一、前田旭邦、竜の口一、谷本旭観、桶狭間一、磯野の秋一、遠藤治子、蓬萊山一、村上、木の橋谷幼舟、二〇三高地一、湯川旭鐘、西郷隆盛一、宮、篠田、吉野山懐古一、川上、吉田、河内島一、水谷浩水、別れの盆一、森泉旭齋、絃岩見旭香、田村、楊、月下の陣一、吉山蓮紅、屋島回願一、白虎隊一、菅沼静水、井伊大老一、志水旭城、本能寺一、奥村静水、(以下特別出演)彰義隊一、静岡伴野鶴風、坂崎出羽守一、金沢田中篁水、雪の桜田門一、東京藤川晴水、山科の別れ一、東京一、平井洲誠。尚連盟理事長稲葉葵水は当日会場で挨拶の熱弁をふるう筈のところ病篤くて出場不能のため、数日後故人となられた事は返す返すも残念であった。

故升久前会長追善 十月二十八日(日)午後秋の琵琶演奏会 一時松山市民会館、主

催愛媛琵琶連盟、後援愛媛邦楽連盟。君が代一、有志、斎藤実盛一、原田旭悠鳥、曲垣平九郎一、斎藤旭苑、鶴ヶ岡一、木村旭照、源実朝一、和田旭秀、安宅一、井出旭明、春日山懐古一、松本翠寿、堅田落一、遠藤旭佳、大桶公一、西森旭生、竜の口一、湯藤旭窓、勳進帳一、白石旭優、西郷隆盛一、村上旭隆、平野国臣一、京岡旭制、ひよどり越一、栗田絲水、戦艦大和一、石塚旭奏、五条橋一、森脇旭悠、都落ち一、佐竹旭登、白虎隊一、佐藤晃絃、水天門一、升久旭好、太田道隆一、徳島井上松鳴、筑紫の明月一、岡辻鶴鳴、曾我兄弟一、浅田芦水、剣士二、尺八、琴各一。

西宮市民文化祭協賛 十月二十九日(日)零

琵琶と詩吟詩舞の会 時半西宮市立夙川公民館、主催三浦連水会 詩吟連水会歌一、合奏、磯野の秋一、遠藤治子、蓬萊山一、村上、木の橋谷幼舟、二〇三高地一、湯川旭鐘、西郷隆盛一、宮、篠田、吉野山懐古一、川上、吉田、河内島一、水谷浩水、別れの盆一、森泉旭齋、絃岩見旭香、田村、楊、月下の陣一、吉山蓮紅、屋島回願一、千藤吟泉、竹内優水、浮舟一、山崎蓮枝、菊水の旗一、反町紫水、琵琶奏母常盤一、三浦連水、立方三、琵琶塚一、神戸久内舟水、文天祥一、京都平井春嶺、大和懐古一、神戸蔵本司水、殿島の戦一、大阪山崎旭好、日蓮誕生一、三浦連水、外に詩吟二十四、詩舞三(青柳芳枝外)。

越谷市民文化祭参加 十月二十九日(日)二 邦楽部門演奏会 時一四時、十一月三日(日)十時一四時越谷市立福祉会館、主催市文化連盟邦楽協会。邦楽協会々長鈴木流泉氏が

復活十六周年 十一月三日(日)十時一四時 浅野晴風演奏会 時半東京中野区公会堂、主催晴風一門会。門琵琶一門、陸摩守忠度望月啞江、平知盛一、浅野晴風、旅一、矢仲青紀美、河内の宿一、竹内青寿、重衛一、森田青芳、月下の陣一、本橋錦風、紅葉狩一、加藤青美佐、山科の別れ一、坂入晴峰、彰義隊一、青木晴城、坂崎出羽守一、大関秀子、竜の口一、加藤錦陽、青山播磨一、杉山雅春、武蔵野一、若林晴波、薄陽江一、山下晴楓、設楽原一、浅野晴風、(以下贊助出演)天目山一、山崎典水、小栗栖一、押川旭葉、滝口入道一、関口竜城、恩響の彼方へ一、谷暉水、外に詩吟九、長唄一。

筑前琵琶日本正調会 十一月五日(日)正午

秋季演奏会 吹田市民会館大ホール、主催同会、後援同市教育委員会。君が代、龍原旭上、錦の御旗一、山本鎮舟、茶臼山一、小川旭光、小栗栖一、辻旭城、旅順の乃木將軍一、宮下旭富、菊水の旗一、矢野旭信、蛤御門一、宮下旭王、堪忍袋一、光旭仙、坂本竜馬一、伊東旭山、広徳寺一、空野旭陽、堅田落一、石橋旭嶺、薄陽江(上)一、平井春嶺、舟舟慶一、戸田旭公、坂本竜馬一、伊吹旭元、二〇三高地一、龍原旭上、弁の内侍一、岡部錦蝶、回天の義拳一、奥村旭美、雪晴れ一、野尻撰水、大阪夏の陣一、龍原妙絃。

四十七年度芸術祭参加 十一月十日(日)夕

水藤錦穂リサイタル 六時半東京大手町

日経ホール、後援日本琵琶楽協会。琵琶道五十年にちなんで特催されたもので①曲垣平九郎一、錦穂、②耳なし芳一、錦穂、③しぐれ曾我一、錦穂、尺八入、④屋島懐古一、錦穂、新部桜水、藤波桜華、津谷桜佳、尺八、十七絃立方永田咏混一門。

普門義則(史城)氏 十月九日愛媛大

松山市の琵琶人と談話 学に於ける東洋音楽会・総会に出席のため金田一春彦博士同伴松山市に出張の機会に十日夜愛媛琵琶連盟会

錦心流琵琶 十一月五日(日)十二時半大阪

秋季演奏会 府立婦人会館、主催一水会大

阪支部、後援神戸京都兩支部。一水会詩一、有志、城山の月一、菊地庸子、荒城の月一、小西南水、井伊大老一、養老駿水、屋島の誓一、宮原聖水、城山一、松岡玲水、毒饅頭一、松原絹水、川中島一、小塩梁水、竜の口一、飯塚綾水、石童丸一、佐々木寒水、会津白虎隊一、植田豊水、吟詠一、古田東水、須磨の敦盛一、中西鏡水、戸隠山一、木村連水、花吹雪一、田中歎水、伊豆の御難一、中山鳳水、俊寛(下)一、米沢柳水、木村重成。

故三輪桃水師七回忌追悼 十一月十二日

花友会秋の琵琶演奏会 (日)午後一時名古屋市中

中小企業福祉会館六階ホール、主催同会、後援中日新聞外。白虎隊一、成田兼月、井伊大老一、中西穂水、広瀬中佐一、小林残水、十五の森一、神藤敬水、西郷隆盛一、谷津壯水、川中島丹野誠水、野田の笛一、加藤澁水、小栗栖一、三輪桃水、山中の月一、大西弦水、木村重成一、阿部勝水、新撰組一、菅沼静水、桜散る頃(録音)一、故三輪桃水、月下の陣一、水谷浩水、菅公一、奥村静水(以下贊助出演)竜の口一、大阪中山鳳水、地震加藤一、東條錦司、詠の木一、同連藤鶴東、大桶公一、松本旭柳、石童丸一、東京前田秋声。

長佐藤晃絃氏宅での歓迎会に金田一博士と共に臨み佐藤会長、浅田芦水、栗田絲水、石塚旭奏、白石旭優、村上旭隆、森脇旭愁、竹久旭好、遠藤旭佳の諸氏と一夕の歓談を楽しまれた。

故三輪桃水師七回忌追悼 十一月十二日

花友会秋の琵琶演奏会 (日)午後一時名古屋

中小企業福祉会館六階ホール、主催同会、

後援中日新聞外。白虎隊一、成田兼月、井伊大老一、中西穂水、広瀬中佐一、小林残水、十五の森一、神藤敬水、西郷隆盛一、谷津壯水、川中島丹野誠水、野田の笛一、加藤澁水、小栗栖一、三輪桃水、山中の月一、大西弦水、木村重成一、阿部勝水、新撰組一、菅沼静水、桜散る頃(録音)一、故三輪桃水、月下の陣一、水谷浩水、菅公一、奥村静水(以下贊助出演)竜の口一、大阪中山鳳水、地震加藤一、東條錦司、詠の木一、同連藤鶴東、大桶公一、松本旭柳、石童丸一、東京前田秋声。

東大阪市文化祭参加琵琶演奏会 十一月

(兼)故中沢旭洋氏追善会 十二日(日)

十一時東大阪市額田会館、主催東大阪旭会。

茶臼山一、駒栄旭良、絃旭総、衣川一、大垣旭景、將軍悲歌一、安田旭富、絃旭登、坂崎出羽守一、下条旭仙、絃旭昇、松の廊下一、高千穂旭楓、絃旭風、羅生門一、戸倉旭嶺、絃旭登、柳の精一、樋口旭総、大桶公一、山本旭紅、壺の浦一、岡田旭連、若き致盛一、若宮旭登、西郷隆盛一、秋元